

庭園を語る言葉のあいまいさ

庭園文化研究分科会 宇野 真一

1. 庭園を語る言葉

“日本庭園”と聞いて大方の日本人が思い浮かべるイメージに大差はないだろう。日常会話で普通に使用する言葉だ。文脈によって“日本式庭園”や“和風庭園”、あるいは“和風の庭”など様々な表現が用いられている。マーケティングの世界では“和風”が多いような気もするが、きっとイメージを喚起する力が強いのだろう。

だが“日本庭園”という言葉には学問的定義は与えられていない。“日本式庭園”や“和風庭園”も同様であり、庭園研究者はそれぞれの著作において自らが使用する言葉を定義し用いている。研究者全員が共有している定義はないのだ。建築界も同様で“日本建築”や“和風建築”に学問的定義は存在しない。“日本”国や“日本”文化を歴史的・一義的に定義することの困難さを思うと解らない話ではないが。

仏像マニアが仏像について語るように、日本庭園について語る庭園マニアは少ない。庭園について語る文章は研究者・造園家・茶人など専門家によるものが大半で、アマチュアが自由に発言しにくい空気も感じてしまう。原因のひとつは日本の伝統文化や芸術を語る時に必ずでてくる言葉たちだ。聞いたことはあるが簡潔に説明することができない言葉。“涅槃”、“禅の世界観”、“わび・さび”などが代表的だろうか。

庭園を語ろうとする場合、“平庭式”、“回遊式”、“池泉式”など即物的な表現は使用できるのだが、感覚的な表現を試みようとするすると専門家たちの言葉、特に”美意識“に繋がる言葉が思い浮かばれ口ごもってしまうことが多い。“かっこいい”、“かわいい”、“癒される”で気軽に庭園を愛でるほうが健全だとも思うのだが。

様式を表す言葉も多少厄介である。即物的表現としての“枯山水”は池・流れの有無を示しているに過ぎないが、文脈によってはより限定的な意味で用いることもあり専門知識がないと混乱することもある。

2. 真行草について

“真行草”は一般的に、① 漢字の書体の、真書（楷書）・行書・草書のこと。② 日本人の美意識の表現として用いられる3段階の様式表現であり、最も格式高い「真」、その対極に位置する「草」、その中間が「行」と説明される。間違いではないが十分ではなく、神格化というミスリードを招く要因ではないかと思う。

中村保雄は『芸能における真行草--和様化への道』（芸能史研究、1974年45号）で、“真行草”は書において形態論として形成され、やがてその形態を習得するために楷梯論（稽古）として発展し、さらに時代が経つとそこに適場論（心意）の問題を付与し深化した。日本においては“真行草”を形態論、稽古論、適場論を一同に取り入れ、それぞれの芸能に都合よく肉付けされたと述べている。-----（大意）

つまり上記①、②以外に、書以外の芸能における形態論と階梯論としての“真行草”があることになる。階梯論としての“真行草”とは初級・中級・上級の言い換えに過ぎない。

“真行草”という言葉が美意識と深く関わっている茶の世界などがむしろ例外的ではないだろうか。事実、日本建築や日本庭園における“真行草”は空間の格を示す言葉であり、そこに優劣もない。いわば形態論に近い使われ方であり、TPOでいえば真＝礼服、行＝ネクタイ着用、草＝私服OKという空間のイメージといったところであろうか。



図1 真の延段
(吉賀町：村上氏庭園)



図2 行の延段
(奥出雲町：櫻井氏庭園)

3. 『図解庭造法』

庭造りの参考書のようなものは江戸時代から出版されており、代表的な書籍としては『築山庭造伝（前編）』（北山援琴、1735）、『築山庭造伝（後編）』（秋里離島、1828）などがあげられる。

近代日本初の庭園書となるのは、明治29年、洋画家の本多錦吉郎が出版した『図解庭造法』で、遠近法を用いた図版を解説に用い、伝統的庭造りの考え方を秩序立てて説明している。この中で庭園は假山・平庭・茶庭に大別され、假山と平庭はそれぞれ真体・行体・草体の3タイプが例示されている。

ロンドン出身の建築家でお雇い外国人として来日していたジョサイア・コンドルは、本多の著作を底本として『Landscape Gardening in Japan』（1893年）を著し、欧米に日本庭園を初めて紹介した。コンドルは著作の中で日本庭園の様式・型として“真行草”を紹介し、しかし実践においては様式・型に囚われてはいないこと、むしろ型からの逸脱こそが重要であると述べている。

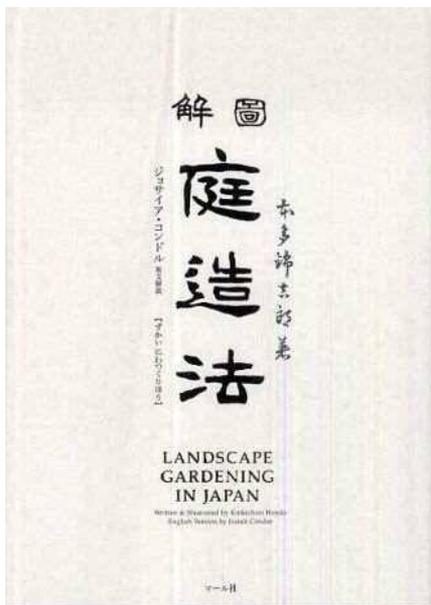


図3 図解庭造法

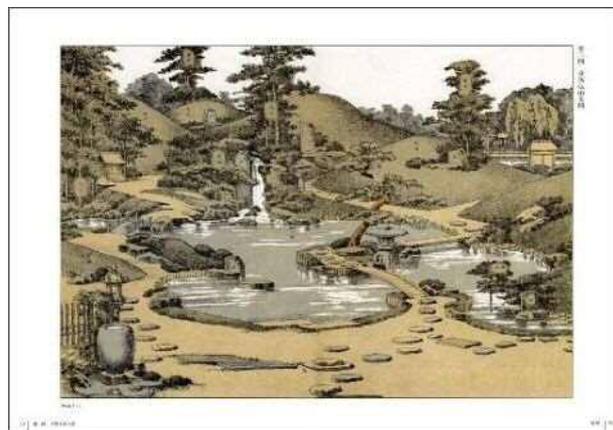


図4 真体假山図解図

ところが、近代造園学の確立期にあたる昭和初期の時点で『図解庭造法』に与えられた評価は「庭造法を普及させた功績は多とするが、新鮮味・独創性に欠ける」といったものである。本多の意図が伝統的庭造りについて考え方の大要をまとめて近代的な庭園設計の資料にすることだったとすれば、不当に歪められた評価といえよう。

また、コンドルに対しては「欧米人の日本庭園に対する理解は“真行草”などの表面的理解に留まりがちであり、その要因はコンドルにも求められる」といった程度の評価しかされていない。

本多とコンドルに対する評価が不当に低い理由は明白で、“真行草”を重視しているように思われたからである。近代化≡江戸文化の否定という力学も見過ごせないが、とにかく日本庭園における“真行草”は整理・理解を助けるための単なる枠組みであり、庭づくりの原理や美意識とまでは成りえていない。知って損はないけれども庭園鑑賞に必須の知識とまではいえない。

4. わび・さび

古来より日本人の美意識を表すとされてきた言葉はいくつもあるが、ひとつの特徴として不完全なものへの積極的評価があげられる。“おかし”、“あわれ”、“わび”、“さび”といった言葉がそうだ。壮麗・豪華・完璧であるものを否定するわけではないが、その対極にあるものにも美を見出す感性＝美意識であろう。

“さび”は寂しい“わび”は侘しいに通じ、本来は満ち足りていない状態や孤独・疎外感を表す否定的な言葉であったが、時代を経るにつれて枯淡・閑寂の趣を表すようになっていく。現在、2つの言葉に一般的な意味での違いはなく、“わび・さび”とまとめて使うことも多い。

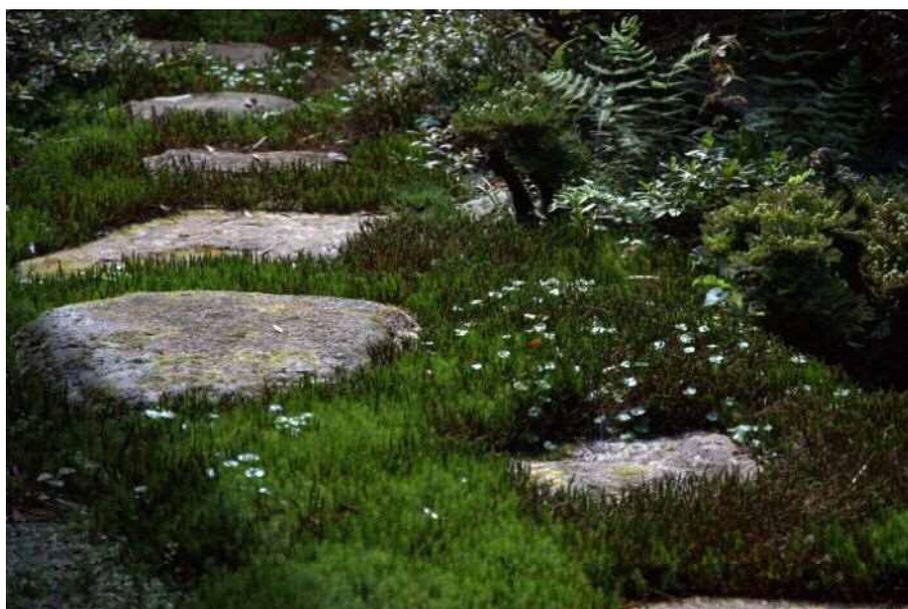


図5 飛石（太田市：願楽寺庭園）

日本庭園でも“わび・さび”はよく使われている。多くの方がその言葉から思い浮かべるイメージは共有できているはずだが、それを別の言葉で明瞭に説明する自信は全くない、そんな不思議な言葉でもある。

明治以降、“わび”と“さび”は西洋哲学に対抗しうる東洋的認識という役割が与えられた。つまり、単なる“美意識”を表した言葉ではなく、哲学的・仏教的思索を重ね深い認識を得たものでなければ感知しえない境地を表す言葉となってしまったのだ。素人が軽々しく口にできない雰囲気があるのはそのせいである。

しかし、情景やイメージを伝える言葉としてもっと気軽に使ってもよいのではないか。自称文化人の銜学趣味につきあう義理は無い。

“わび”と“さび”の微妙な違いは時間という観点から区分できる。

“わび”は時間が経過してきた様（さま），“さび”は時間が止まり終わった様（さま）に見いだせる美である。“古び（に宿る美）”と“滅び（に宿る美）”と言っても良い。

例えば、雨垂れが穿ったくぼみ、苔むした岩、すり減った石畳など時間の経過が生んだものに感じる美が“わび”であり、古戦場や廃墟に立った時感じる美が“さび”である。まあ“渋い”という言葉でも近いニュアンスは伝わるかもしれないが。



図6 浜田市三隅町：大麻山神社庭園

5. 最後に

今回“美意識”にまつわる言葉という技術とは関係なさそうなテーマで漠然としたことをレポートしたのにはある理由がある。“design”という言葉について土木分野の多くの方と理解が一致しないのだ。

建築を学んだ者にとって「建築設計≡architectural design」、「建築工学≡architectural engineering」であり2つの言葉が指し示す内容はもちろん異なる。当然、「土木設計≡civil design」、「土木工学≡civil engineering」となるはずなのだが、「土木設計≡civil engineering」が一般的とされる。

土木設計は“engineering “であり” design “ではないと宣言しているように感じるのだ。“design” → “デザイン” → “意匠” ≠ “土木設計”という変換なのかと邪推しているが、“engineering”は”設計 “の根幹にあるが全てではない。”デザイン “という視点を欠いた土木設計が景観破壊を招いている現実も多くあるのではないか。“デザイン”が苦手な設計者はいても不思議はないが“design”ができない設計者など存在矛盾ではないだろうか。

要するに、“デザイン”が苦手と感じている皆さん、まずは庭園を愛でながら“デザイン”と“design”について考えてみませんか。